

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530514

研究課題名（和文）断種法制定運動のリーダー永井潜の生涯と活動—東大医学部生理学教室を  
拠点として

研究課題名（英文）Life and Work of Hisomu Nagai, Leader of Eugenic Movement:

Department of Physiology, University of Tokyo School of Medicine as His Base

研究代表者 岡田 英己子 (OKADA EMIKO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：10233321

**研究成果の概要（和文）：**

「新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史—平塚らいてうの優生思想の再考から」の継続研究。平塚が優生思想に親近感を持つ背景を永井潜の生涯と活動から検討。東大医学部生理学教室の大澤謙二・永井潜、日本女子大学の成瀬仁蔵が、若き平塚の優生思想形成に影響を持つ。優生運動でも同教室が主導するが、これは平塚のフェミニズムに依拠する優生思想とは異なる。

成果は[URL]<http://www.comp.tmu.ac.jp/yuseigaku> に掲載、日独比較の優生学歴史研究方法のモデルを示した。

**研究成果の概要（英文）：**

This is continued research on our subject, “New and Old Eugenics and Comparative History of Japan and Germany with Regard to Criticism of the Nazi Sterilization Law: Reconsideration of Raicho Hiratuka Eugenism” We analyze why Hiratuka came to have an affinity for eugenics by the method of linking her to the life and work of Hisomu Nagai. He and Kenji Osawa of the Physiology Department and Jinzo Naruse from Japan Women’s University influenced young Hiratuka to form her theory of eugenics. Those from the Physiology Department had a leading role in the eugenic movement. Their theory differed from hers, which was based on feminism.

The results are on the [URL]<http://www.comp.tmu.ac.jp/yuseigaku>, showing as a model of the methods for historical research of eugenics focusing on comparisons between Japan and Germany.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学(社会福祉学)

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学(3802)

キーワード：永井潜、大澤謙二、平塚らいてう、優生思想/優生学、母性、フェミニズム、断種法、ドイツ

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代を通じて、「平塚らいてうは優生思想の持ち主」論が流布した。しかし、その典拠は曖昧で、誤った引用も目立つ通説であった。平塚はたしかに優生思想の持ち主ではあるが、断種法制定運動を率いたわけではないからだ。本研究に際しても、平成17年～19年度科研テーマ「新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史—平塚らいてうの優生思想の再考から」を引き継ぎ、「平塚らいてうの優生思想を考える」を基軸にする。

今回は、いつ頃から、どこで、平塚が優生思想に親近感を抱くのかを、東大医学部生理学教室の立ち上げにまで遡及して調べる。具体的には、生理学教室初代教授大澤謙二が組織する男性主導の優生運動と対比させて検討する。東大医学部草創期の平塚を取り巻く師弟関係と縁故関係が相互に絡む人脈を調べ、それが生理学教室を強固にする戦略にもなる点を、人物解題を通して浮上させていく。同教室は草創期から学内での権力掌握に熱心で、それは教室を率いる大澤謙二・永井潜・橋田邦彦が共有する姿勢となる。この教室運営ポリシーこそが、大澤-永井の優生思想の啓蒙活動の最大の動機になると、予見される。

## 2. 研究の目的

### (1) 二つの目的

研究の主目的は、上述の如く戦前日本の優生運動に最も早く関わる生理学教室の動機・役割を明らかにすることにある。むろん断種法制定論議が時代思潮になると、東大出身者の官僚・医師も大いなる関心を寄せる。他教室でもある。が、第一次世界大戦前に優生思想絡みの政策提言や啓蒙活動を試みるのは、学内では生理学教室以外には見当たらない。状況はドイツでも似ている。それだけに、なぜ、かくも早い段階で、生理学教室の初代・二代教授が、優生結婚や花柳病予防に突出した熱意を持つのか。この背景解明が主たる課題になる。

むろん平塚が発する優生学的言説は、フェミニズム論と優生思想の親和性を気付かせてくれる格好の素材になるから、ドイツ・フェミニストの「母性」言説と優生学的言説からの距離の置き方と比較させる手法も、継続して取り入れる。

### (2) 最新研究動向

最新の研究動向にもここでふれておく。

日本での優生学歴史研究は、ブームは過ぎ去ったようだ。1990年代の興隆と、その後の失速状況を鑑みて、そう言える。若手研究者間での関心はなお高く、斬新な指摘も多いのだが、社会福祉・障害児教育分野に関して言

うならば、批判のその先にある課題を史資料に基づき検討し、何をもって優生思想の持ち主と査定するのか/できるのかの追求にまでには至らない。欧米でも過去の批判に終始し、拙速に結論を出す悪しき傾向は頻発する。ただし、ドイツ語圏では現在でも地域史と個別施設史・精神病院史の調査が持続し、展示会の成果は学校教育教材でも活用されている。日本にはこうした広がりはないし、研究の継続も少ない。

では、1990年代のブームは一過性のものであったのか。そうだとすれば、それは日本のやや特異な優生学歴史研究方法論の結果ではないのか。なぜ、ドイツ語圏のように研究の裾野が広がらないのか。先に筆者は1980年代から2000年前後の日独研究動向は終えている。よって今回は最新動向の整理は省くが、これも平成17年度からの問題関心である。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献研究

文献研究で、国内外で史資料収集をする。ドイツ社会問題研究所(Dzi)やゲッチンゲン大学等での調査も加えて、ドイツ医学が採用され、東大医学部の研究基盤が強化される経緯を見ていく。これにより、大澤が権力を掌握していく背景理解が深められよう。ここでは、年譜・人物解題の作成が主たる作業課題になる。

分析視点としては、「優生思想の持ち主」との批判に平塚がどの程度に該当するのかを念頭に置き、男性主導の優生運動と保守派女性集団の連携に焦点を当てる。生理学教室と日本女子大学の繋がりが把握できる年譜・人物解題によって、フェミニストの運動が制約される日本においては優生思想の啓蒙活動も男性主導で組織され、運動に発展することを示す。

つまり、平塚が「いか程の優生思想の持ち主なのか」、それは「女性の国民化」のために妥協を重ねるフェミニストの顛末なのかを設問にして、検討していく。とりわけ若き平塚が優生思想に関心を持つ契機が、フェミニズム論の永遠のアポリアともいえる本質主義からの脱却か、それとも追隨かに注目し、欧米フェミニスト、とりわけドイツ穏健派フェミニストと比較させながら、「なお優生学的立場から……断種法の施行を命じたりすることは我国でも今すぐにでも望ましいことです」と記すに至る平塚の(平塚らいてう著作集[1983]2巻、大月書店、340)、「母性」言説と優生思想の癒着を検討に加える。むろんフェミニズム論史のアポリアであるから、答えは出にくいのだが。

## (2) 具体的な検討対象と手順

優生思想の啓蒙活動を、早くから学術的権威の名の下で仕切る筆頭に、大澤がいる。断種法制定運動リーダーとして名を馳せる永井もある。そこで両名の生涯と活動を辿っていく。永井の年譜と永井家の家系図作成、さらに東大医学部草創期の人脈の繋がりを調べれば、私的資料を残さなかった永井の生涯に迫れるだろう。また永井の活動歴は、大澤-永井の生理学教室の基盤固めとの関連で検討する。

同時に先述の分析視点に基づき、生理学教室と日本女子大学校の成瀬との接点にも言及する。同じ女性主導の運動であっても、平塚が率いる花柳病男子結婚制限の請願とは、異質であることを確認する作業となる。

以上の二点をふまえて、考察では戦前日本の断種法制定運動の発端が、生理学教室を拠点とする男性主導であることを検証する。

ここでの結論を前もって言うならば、1990年代に通説化する平塚等のフェミニストによる請願が、優生関連政策に影響を及ぼすことはない。女性主導の優生運動は、エリート男性が描く構想の一端を担う形で、組織されるからである。その典型は、永井の主査で、東大で医学博士号を取得する竹内茂代の役割であろう。1935年設立の日本優生結婚普及会は、会長は永井、副会長は竹内と永井の妻が就任する。

つまり、時の権力と癒着する生理学教室が優生運動の口火を切り、日本女子大学校他の女性教員が同教室と連携する形で、優生思想の啓蒙活動に参画していく。女性主導を貫くドイツ・フェミニズム運動との決定的な違いは、この点にある。

## 4. 研究成果

### (1) 研究成果の概要

今回は平塚が優生思想に親近感を持つ背景解明を、永井サイドから照射する形で検討した。

というのは、大澤・永井、並びに日本女子大学校の成瀬が、若き平塚の優生思想形成に影響力を持つからである。が、1920年代半ばからの双方の動きは大きく分かれる。断種法制定(国民優生法)運動が本格化する時期になるや、東大が台頭する。官僚と医学部教授の結託である。これは内奥の声を聴く天賦の才を有し、常に権力抗争からは距離を置き、社会活動をする平塚とは決定的に異なる生き方である。

平塚はフェミニズムに依拠する優生思想を時たま吐露する。これに対して、生理学教室を拠点とする大澤・永井、および日本女子大学校の井上秀子等の運動は、男性主導で組織される。権力に迎合するこの種の運動と、女性の身体性への覚醒を促すフェミニスト

による産児制限・母子保護の真意とは、かけ離れている。そこで、2008年度はドイツ・フェミニスト穏健派の社会政策提言は実利性に富み、「母性」言説と優生学的言説の混同はない点を指摘(岡田[2008];岡田[2009.3])。さらに2009年度は「ドイツ女性史におけるフェミニストと母性:新たなジレンマ?」論稿で(岡田[2010.3])、保守派女性運動や「反」フェミニズムとは1920年代前半には明確に対峙し、「母性」言説から決別する経緯を明らかにした。

以下、四点にわたり成果を課題別に整理しておく。

### ① 国家を背負う男性主導の優生運動

日本フェミニズム運動の旗手となる平塚は、日本女子大学校で優生思想の洗礼を受ける。成瀬は合衆国経由の女性教育情報から、大澤は生理学講義から、時代思潮となりつつある優生思想を披露する。

第一次世界大戦までは、後の断種法(国民優生法)制定に繋がる諸活動を率いる筆頭に、生理学教室は位置する。東大出身の官僚・医師がナチ断種法に傾倒するのは、1933年以降で、この時流に乗る一群と大澤とは異なる。早い段階で、結婚制限や花柳病予防に関心を持つ大澤は、幕末獅子の気概を胸に、日本近代化の一環で生理学教室の布陣を固める。これは日独を通じて、フェミニストによる女性主導の優生運動とは位相が異なる。国家を背負う男性主導の優生運動であった。

ただし、「永井潜の生涯と活動」を辿る年譜作成に際しても、以下の疑問は最後まで解けなかった。旧制高校・医学部教養課程では彼の哲学・生命論テキストは人気があり、版を重ねる。多作で、各種講演会や県人会等の集まりにも積極的に参加。多弁でもある。が、個人・家族に関する記録類は、なぜか皆無に近い。よって要所要所で、永井を取り巻く人々の行動・発言から、彼の内面や活動動機を推察せざるをえなかった。年譜の章立ても後半生は仮案のままで、HP掲載している。

ちなみに、永井のゲッチンゲン時代に、ドイツでは優生思想が優生学として脚光を浴び始める。ゲッチンゲン大学での永井の所属記録類は、2回の調査でも見つからない。が、関連文献から、当時の心情は推測できる。専攻の生理学実験ではドイツ学生に敵わないし、そもそも実験に全く興味が湧かない。帰国後に約束された助教授ポストに就くには、お飾り業績を重ねるしかない。大澤好みの優生結婚・人口政策の文献を集め、研鑽に励む姿を誇示したであろう。神童と呼ばれた彼が鬱々とした気持ちで過ごすのは当然であった。当地でも女性高等教育や児童欠陥への関心が高まっているから、講演・研究集会にも赴いたであろう。というのは、永井は医学部

生時代に、知己であった高島平三郎との関係で、『児童研究』に1899年と1900年、児童欠陥と胎児奇形に関する最初の小論を書くからである。生理学に興味がないとなれば、自ずと一般教養的な知見で業績を重ねるしかない。初期の小論が、その後の研究内容を決したように思う。生理学研究に時間を割く代わりに、県人会的な定例会にはほぼ欠かさず顔を出し、夜の飲み会まで付き合う。大学人としての処世術には長けていたようだ。

そもそも臨床系に対して生理学教室の存在感を誇示する姿勢は、初代教授大澤が範を示す。愛弟子橋田が文部大臣の責務を担い、非業の最期を遂げるのも、国家を背負う気概で渡独、医学部草創期の布陣を整える大澤の派手な活動が多分に影響していたと考えられる。

## ② 女性主導という名目での男性主導の優生運動—日独比較から

第一次世界大戦が国民国家の人口政策に与えた影響は、計り知れない。ここより世界的傾向として、1910年代半ばから1920年代初頭に「母性」言説が党派・政治的信条を超えて強まる。さほど人気のなかった優生思想の講演や結婚制限という政策提言が、一般大衆レベルで関心を集めるのもこの頃からで、日本でもようやく断種法制定の機運が出てきたと、大澤-永井は考えたであろう。

状況はドイツや近隣諸国、合衆国も似ていた。苛立つほどの啓蒙活動の低調さが、1910年頃の特徴であった。例えば、1911年開催のドイツのドレスデン博覧会の例をあげれば分かりやすい。人種衛生学部門の展示は関係各位の熱意とは裏腹に、観客は動員できない。遺伝の恐怖を煽り、優生結婚を説くような展示に感銘を持つ人はさほどいない。そんなものを見るよりも、博覧会場には興味を惹く展示がたくさんあったからで、広義の優生運動に大衆の関心は盛り上がらない。無知な大衆向けには、上からの仕掛けなくしては運動は広まらないと、リーダー格は肝に命じていく。それだけに、19世紀末から優生運動を推進してきた一群から見れば、戦争勃発は啓蒙活動を超える運動組織化の好機と映る。機を見るに敏感な永井がそれを見逃すはずはない。1914年から果敢な執筆活動を開始し、優生思想の啓蒙活動に邁進していく(永井潜年譜参照)。

これは逆に見れば、大戦前のフェミニズム運動は母子保護政策の提言を練っていても、そこに優生思想を取り込み、大衆向けアピールをする必要はないことを意味する。ユートピア的な優生思想など眼中になかったといえる。政策で勝負できるかもしれない。ドイツでは穏健派フェミニストは後者を採用する。優生思想を持ち出すのは、どちらかと言

えば一匹オオカミ的なフェミニストであり、かつ背後に男性論客の操作が多分にあった。

## ③ 大澤謙二と若き平塚らいてうの接点と分岐点

平塚と大澤との接点は幾重にもわたる。別稿で明らかにしている(岡田[2008.2]平成19年科研最終報告冊子、<http://hdl.handle.net./10748/2162>)、ここでは簡単にふれるに留めるが、立場の違いは大きい。大澤は保守派女性論を展開、ほどなく「反」フェミニズムの陣営に属するようになるからだ。

当初、平塚は大澤講義の「科学」言説に嵌る。生理学知見は中立的な身体論と解されやすい。ほどなく彼女は医者が述べる生理学から見た性差論に、家父長制の権力装置が埋め込まれているのを、直感で悟る。成瀬講義への幻滅も禁じえず、井上が仕切る寮も出る。成瀬教信徒の同級生とは距離をおき、通学しても図書館に籠る日々。「変人」と学内で噂される。

方や大澤は、日本女子大学校の開校以来、20年近く同校に通う。成瀬と幾度も女性教育構想を語ったであろう。後に生理学講義は永井に託される。両名は通算30数年も、結婚制限や優生思想に彩られた生理学講義を、日本女子大学校で教える。女性向け啓蒙活動にも両名は熱心で、大澤は新聞・女性誌に女性の生き方や花柳病関連記事を多数執筆する。これは戦前日本の断種法制定運動のリーダーとされる永井にも受け継がれる。両名の意図する所は何だったのか。生理学から見た性差論と優生結婚を強調したかっただと思う。その結果、女性の自立を説きながら、「反」フェミニズムに与してしまう。

同校での講義は、優生結婚の事前教育や啓蒙活動が脳裏にある永井には、恰好の場であったろう。後の民族衛生学会(1930年発足、民族衛生協会と1935年7月改称)の啓蒙映画「結婚十字街」制作や、日本優生結婚普及会結成に向けての下地づくりに励む。ここでの女性動員は男性主導の下で組織され、同校関係者も発起人・賛同者に名を連ねる。

ちなみに、同校からの平塚の除名処分は素早く行われる。1908年塩原事件の10日程経ってからである。が、除名解除は遅れる。スキャンダラスな女を排除し、井上が成瀬の意向を汲み取る形で、権力の階段を駆け上がっていく時期と合致する。「女性の王国」最高学府の自負心を胸に、国家を背負う生き方を引き受ける。「女性解放」らしさも標榜するが、内実は「反」フェミニズムと差はない。

こうした師弟関係・縁故関係の絡みで成り立つ言説空間が、優生結婚を一般常識として学内外に撒き散らし、結果的には民族衛生学会の啓蒙活動を引き受ける卒業生の一群を

産出していく。これは大澤-永井の長年にわたる同校での講義成果でもあった。

#### ④ 永井潜と平塚らいてうの優生学的言説の比較

「母性」言説と優生学的言説は融合しやすいために、優生学歴史研究では史資料読み込みと、慎重な解釈が求められる。今回は、『婦人公論』誌上での言説比較をHPに掲載した。

優生思想の啓蒙活動の目ざす到達地平に関しては、決定的な違いが兩名にはある。それだけに、兩名の社会政策へのスタンスを見ないと、比較対象にはなりにくい。しかし、戦前日本フェミニストで政策提言の表舞台に出るものは、1920年代初頭は皆無に近いので、代わりにドイツ・フェミニストの「母性」言説や優生学的言説の有無と比較させることで、背景理解を深める手法を用いた。

母性主義の国ドイツの論壇への対処に長けるドイツ女性団体連合(BDF)のフェミニストと、自前のフェミニズム論の論争の場が持たず、『婦人公論』他のメディアに依存する形での論争しかできない平塚。国際比較から見えてくる論壇の格差に、今回は注意を払った。さもなくば、大澤-永井の日本女子大学校での講義意図も、日本女子大学校設立に際して成瀬が胸に秘めていた優生思想に基づく次世代育成構想も見えにくいからだ。

これに対して、同時期のドイツ・フェミニストは、自前の機関誌で論陣を張れたし、BDFは社会政策の専門委員会・作業部会で効果的な政策提言案を練れた。地方自治体の福祉・教育行政で女性雇用が可能な条件は、すでに1910年頃には出てくる。だから、BDF社会政策通とされるアリス・ザロモンや、女性高等教育運動を通して社会政策分野の職域開拓を提起するヘレーネ・ラング等の、穏健派フェミニストの「母性」言説には、優生思想はない。母性主義の国ドイツの論壇を見ずして、玉虫色の「母性」言説を駆使することはあっても、である(岡田[2010])。1920年代の全般的な女性運動の低迷は、むしろドイツでも顕著であるし、フェミニストの世代間対立もあるのだが、それでも虚構に満ちた優生思想を母子保護政策に入れ込むフェミニストは稀であった。

つまり、自立・自己決定権を自前の組織で確保できるドイツ・フェミニストと、男性主導で優生運動を担う女性が育成される国との差は大きい。それだけに、フェミニストを対象にする優生学国際比較史の研究枠組みづくりを検討するべき時だろう。

以上が、「平塚らいてうの優生思想を考える」研究を開始する時にぶつかった壁であり、現時点における「永井潜の生涯と活動」小活になる。優生結婚を奨励する活動の拠点とな

る東大並びに日本女子大学校との連携も、永井の断種法制定運動に携わる動機も、意外に早くから形成されていることが判明した。特定地域の婚姻圏で成り立つ家系と、高島による学童期の熏陶が、障害児誕生の恐怖感を煽り、『児童研究』向けの執筆を通して、優生思想の啓蒙活動を脳裏に描くようになる。専攻が定まらない永井を、大学草創期で弟子のいない大澤が激励し、将来を約束したことも、永井の前半生を決する。永井像の見えにくさの故に、後半生の調査に今回は時間が割けなかった。継続課題にしていく。

#### (2) 今回のHP掲載の概要

HP掲載をもって最終報告成果にする。  
[URL]<http://www.comp.tmu.ac.jp/yuseigaku>である。東大医学部の系譜が把握できる人物解題に力点を置いた。断種法制定運動で発せられる言葉は、時の権力を代弁する。その権力構図の一端を紹介する。研究に軸足を置く一群と、永井のように社会貢献で名声を獲得し、学内では学部長・総長選挙に暗躍する一群との対比も試みる。

【HPの冒頭に掲げた方針は以下の通り。

① 問題意識は、「平塚らいてうの優生思想を考える」で、東京都立大学市民カレッジでの岡田英己子講義を契機にして、2000年から持続的に取り組んでいる研究成果の一部を公開します。

② 断種法制定の立役者とされる東大生理学教室教授の大澤謙二・永井潜と、日本女子大学校の成瀬仁蔵・平塚らいてうの関係を明らかにすることで、平塚らいてうがどのようにして優生思想を形成していくのかを辿ることが、このHPの趣旨になります。

③ 戦前日本のフェミニズム運動の旗手平塚らいてうは、日本女子大学校時代に優生思想の講義にふれます。東大の大澤謙二が非常勤講師で同校に教えに行く時期です。著名フェミニストが、「優生思想の持ち主」と査定されてしまう経緯と時代背景を、史資料に即して解明することが、このHPの主たる作業課題です。

④ 優生学・優生思想を分析したドイツ・フェミニズム論・関連女性組織との日独比較史研究も、HPでは視野に含めています」の四点である(HPトップ・ページから引用)。

日独比較を機軸にする優生学の歴史研究方法論のモデル例になるものを今回は示した。HPの公開性を考慮し、掲載事項は永井と東大医学部の系譜、および日本女子大学校の関わりに絞っている。

#### 【HP構成】

二つに大別される。

「永井潜の生涯と活動」について：「絵で見る永井潜の交流関係」では、I. 永井潜に

関わる群像、II. 永井潜に関わる人物解題を提示。「優生学と永井潜関連」では、年譜、家系図、東大医学部関連資料解題を、I～IVに配置している。

「優生学と平塚らいてう関係」について：フェミニスト平塚らいてうと、保守主義者永井潜の優生学的言説が、フェミニズム対「反」フェミニズムの対照をなす点を提示した。優生思想形成の時代背景では、欧米知見に基づく花柳病対策が重要であり、この年表は本年夏に追加する。

(3) 今後のHP掲載と研究の展望に関して

今回のHP掲載分は公開性を鑑みて選択した。例えば写真ではなく、似顔絵を原則用いる方針等もここに含まれる。

今後も掲載可能な年表や資料解題等は、[URL]<http://www.comp.tmu.ac.jp/yuseigaku>に公開し、独訳による海外発信の準備をする。そこで、趣旨・方針を以下に要約しておく。

#### 【HP趣旨】

東大医学部教員と日本女子大学校の関係性を基軸に、平塚がどのようにして優生思想を形成し、優生学的言説を発信するのかが、HPの骨子。日独フェミニストの自立・自己決定権に基づく各人の優生学的言説の比較・査定を通して、男性主導と女性主導の運動組織の違いを考察し、優生学が時の権力と癒着しやすい構造を明らかにしていく。これがHP全体を貫く趣旨になる。

#### 【HP作業手順】

戦前日本のフェミニズム運動の旗手平塚は、日本女子大学校時代に優生思想講義に触発される。著名フェミニストが、日本女子大学校井上秀子に代表される保守派女性団体とは対峙しつつも、優生学的言説を駆使してしまうのはなぜか。同じく性病予防や優生結婚を掲げている同時代の欧米フェミニストとの比較から、各人の真意に迫る人物解題や年譜を整理し、順次、掲載していく。

なお平成25年から独訳を重点課題にする予定である。日独国際比較(ドイツ語圏全域)の優生学歴史研究を、日本側から発信する形を目ざしたい。まずは永井潜関連の年表と研究機関・大学、および戦前日独のフェミニストが率いる女性団体の紹介等から着手する。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

Okada, EMIKO, Alice Salomon : Salomons Ausbildungskonzept auf dem Weg in die jap. Sozialarbeit, Zeitschrift Soziale Arbeit, DZI, 依頼原稿で査読無しだが編集委員数名の点検有、2008、pp. 447-452.

岡田英己子, A. ザロモン像再考: ボランティア・グループの二種類の「呼びかけ」を手がかりにして、人文学報、査読無、409号、2009年3月、pp. 1-21.

岡田英己子, ドイツ女性史におけるフェミニストと母性: 新たなジレンマ、人文学報、査読無、424号、2010年3月、pp. 19-41.

[その他]

ホームページ等

[URL]<http://www.comp.tmu.ac.jp/yuseigaku>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 英己子 (OKADA EMIKO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授  
研究者番号: 10233321

(2) 研究分担者 無し

(3) 連携研究者 無し